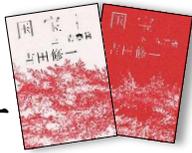


吉田修一『国宝』応援ペーパー



全国の書店員から届いたメッセージ！

(到着順)

有隣堂伊勢佐木町本店 佐伯敦子さん

最も胸を打たれたシーン

両足を失った俊介が、それでも舞台上に立とうとするところ。喜久雄が「悪魔と取引したよ」と娘の綾乃に告げるところ。

感想「きつい。芸の世界は、人の一生とは、こんなにきついものなのか。読んでいて、切なくなる。涙が出てくる。生をまっとうするということがこういうことなのか？ 華やかな世界には必ず影がある。吉田修一さん、すごすぎです。」

教文館 吉江美香さん

最も胸を打たれたシーン

「そう、景色。……そりゃあ、きれいな景色でさ。この世のものとは思えねえんだ。あれを舞台上でやりつてえなって。あんなかで踊れたら、俺はもう役者やめたっていいなって」(下巻・喜久雄)。「その役者の芝居を見るとな、正月迎えたような気分になんねん。気持ちがりりとしてな。これからなんかええこと起こりそうな、そんな気分させてくれんねん。そんな役者、ほかにおるか？」(下巻・徳次)ほか、数え上げたらきりがありません！

感想「新作に触れるたびに不思議に思う、吉田修一は、なぜこんなことをこんなふうに描けるのだろうか。どの場面からも匂い立ち、鮮やかに切り取られ

る情景、情感は**一級品**の更に遙か上をいく。登場人物それぞれの〈命を懸けた覚悟〉に、読者も〈押し潰されない覚悟〉を持ってページをめくる必要がある。文章が皮膚を通過し重量感を増して内臓にまでも届く慟哭のストーリーを堪能してもらいたい。」

平安堂長野店 坂本綾乃さん

最も胸を打たれたシーン

「第十七章 五代目花井白虎 白拍子花子がいいよよ登場するその時に、喜久雄に届く計報。それでも舞台上に立ち、着替えのために袖に戻っての蝶吉との短い会話。そして「分かってる。

でも、もう大丈夫」の一言で**涙腺が決壊**しました。

感想「吉田修一さんが描く作品には強くそこに生きる人物たちの汗の臭いがする。今作にも稽古に励む喜久雄たち、任侠の世界に生きる男たちの死闘にも

同じ臭いを感じたと同時に、「Water」を読んで感じた**青春の瑞々しさ**と、どこか甘酸っぱい匂いも感じて、読み終えてもう今すぐ誰かに薦めたくてしかたがなかった。

喜久雄はたぶん幸せだったと、私は信じたい。舞台上は一瞬の夢かもしれないけれど、そこに立つ役者には、それぞれの人生がある。私たち観客は一瞬の夢を見たいのだ。声を大にして叫ぶ「ボロボロになっても、何度も立ち上がった

一人の男の美しい生きざまを見ろ!!」と……。

芳林堂書店東長崎店 飯田和之さん

最も胸を打たれたシーン

やはりラスト。喜久雄が見たかった風景を目にすることができ、その域に達した喜久雄が舞台から退場していくところ

感想「**壮絶な人生**だった。歌舞伎が上手くなるために全てを捨て、悪魔に魂を売った男・喜久雄は果たして幸せだったのか、孫の喜重を心配するシーンを見ていると、まだ人間としての感情が残っていたのかもしれない。」

ジュンク堂書店池袋本店 田口久美子さん

感想「著者は歌舞伎の400年以上の波瀾万丈を、かの役者に凝縮・体現させているかのようだ。ここには物語のあらゆる要素と型がつまっている。波瀾万丈

だが騒々しくない、なぜなら著者の**歌舞伎への思い入れが尋**

常ではないから。だが著者は溺れていない、単なる立身出世物語に終わらせていないから。歌舞伎が400年以上の命脈を保つことができた原点のひ

とつに〈大衆(普通の人々)の心情を表現すること〉を決して忘れなかった、そのことを著者は書きたかったのだろう。そして大衆もまた歌舞伎に〈自分たちの魂〉を見出す力を持っていた。私は俊介が温泉宿の小さな劇場で姿を現したとき会場全体がシーンとなる瞬間に涙しました。」

文教堂書店北野店 若木ひとえさん

感想「役者であると同時に人間。本書を読む前は、そう思っていました。読み終えた後は、世間の常識、人としての幸せよりも舞台の上に立つための生き方を何のためらいもなく受け入れるのが役者なのだと思います。そこに立つと、どのような景色が見えるのか、見させてもらえるのか。心地よい

リズムに包まれながら、歌舞伎の知識など何もなくても**圧倒的な力**によって堪能させてもらえます。」

リブロ東銀座店 宮崎さん

感想「この作品『国宝』は、悩み多き現代人や夢を負いかける全ての人に、そして歌舞伎と銀座が大好きな人にぜひ読んでいただきたい、そんな作です。」

ブックセンターほんだ 原田みわさん

最も胸を打たれたシーン

万菊の「美しいもの」に対する深すぎる陰の部分、若い頃の喜久雄に見せた辛辣さ、そして「ほっとするんだよ」と美しいものが何もない場末の安旅館での最期は、胸に強く残りました。

感想「道を極め、誰にもたどりつけない頂点に立った時、喜久雄に見えた世界は、どんなに苦しく美しいものだったのだろう。著者の**鬼気迫る筆致**にも狂気を感じざるを得ない。まさにこれは傑作であり、怪作!!

今井書店 企画開発本部 津田千鶴佳さん

最も胸を打たれたシーン

俊介が亡くなった報を受けながらも、「はい」と合図をする喜久雄の姿。また、その後、狂気の中で舞台上に立ち続け、最後に交差点でつぶやいた「はい」という合図。真の歌舞伎役者としての気概が、それを超越したものとして見せられたように思う。

感想「とんでもないものを読んだ、読んでしまったというのが感想です。最後に記された〈一途な少年〉は、本当に一途そのものだったのだと。最期に演じたのが『阿古屋』。心の乱れを一切見せない阿古屋を演じられたのは、〈役者〉を超え、〈人間〉を超え、〈狂気〉の中で歌舞伎そのものになった喜久雄だからできた役なのかと。悪魔と取引し、美しい景色と思い出の中で、生涯を全うした喜久雄は本当に幸せだったのでしょうか。そして〈人間国宝〉ではなく、〈国宝〉が喜久雄に相応しい称号なのかもしれません。一人の歌舞伎役者の生涯

に、**美しさの真髓**を見ました。」

大盛堂書店 山本亮さん

最も胸を打たれたシーン

下巻183ページ、安宿で死んだ万菊を回想するシーン

感想「読むのを途中で止めることができなかった。いや、役者の衣を身にまとうこの物語の魔手によって、止めさせて貰えなかったというべきか。圧倒的な

文章と苦い感情と何にも代え難い人間の交歓。その向こうに**射るよう**

な光が見える吉田修一の新たな傑作の誕生!!」

精文館書店中島新町店 久田かおりさん

最も胸を打たれたシーン

女として母として、幸子が啖呵を切るシーン。私は彼女の言動にいちいち心を動かされました。俊介出奔後の喜久雄への態度など、本当にすごいとしか言いようがない。特に市駒の出産のときにその世話を焼いたときの言葉。「男なんてどいつもこいつも甲斐性なしで意気地なしのアホばかりやで。でもな、生まれてくる子には、なんの罪もないねん」というこの言葉にはおぼろげにしました。憎み切つて切り捨ててもいいであろう喜久雄とその妻と子の面倒をみる、その心意気と心の底に隠した悔しさや辛さを思うと胸がきりきりと痛みました。

感想「(梨園)というのは秘密のベールに包まれた世界。歌舞伎の世界はなんとなくハイツで高級なイメージがあるけれど、実はわりと泥臭く家庭的だったりもする。そして意外と極道との共通点が多い。表と裏、光と影、聖と邪と相反するよう見えて、身体が資本、(家)を何よりも大切に作る、(親)への

忠義を守る、〈子〉を決して見捨てない、遊ぶ時にはカネに糸目をつけずとことん遊ぶ、そして己の信じた道をひたすらまっすぐ進む。そんな世界を走り抜

けた男たちの物語に、**心が熱くならないわけがない。**」

成田本店みなと高台店 櫻井美怜さん

最も胸を打たれたシーン

俊ぼんがその腕の中で我が子を失うシーンは、短いながらも、物語に深みと広がりを与え、俊介をただのお坊ちゃんではなく、一人の〈男〉としてくれた場面でした。

感想「私たち凡人と、芸の道を極めようとする人とは、こんなにも見ている景色が違うのかと、ただただ圧倒されるばかりでした。けれど、スポットライトとは縁のない私たちにでさえ、白粉の香りや衣擦れの音を感じさせて

くれた吉田修一の筆力は、**ただただあっぱれ**。活字で読む歌舞伎を存分に楽しませてもらいました！」

三省堂書店営業企画室 内田剛さん

感想「昭和の空気も土地の匂いもそのままに、凄まじい筆力で再現した波瀾万丈の人間ドラマ。読み応えはあたかも上質な舞台劇を観たよう。奈落の底から極楽の頂まで光と影の明滅があまりにも鮮やかで見たことのない絶景に魅せられた。平成の最後にこの作品が登場したことは意義深い。濃密にして至高、

読むものすべての記憶に刻まれ、今年のというよりこの時代を代表する**記**

念碑的な一冊だ！」

三省堂書店有楽町店 水口由紀さん

最も胸を打たれたシーン

下巻 351 ページ「それは一人の役者が舞台を降りてきた姿ではなく、今の今まで役者が立っていた舞台が、その一歩ごとに外へ広がってくるような光景でございました」

感想「歌舞伎の世界と波瀾万丈な歌舞伎役者の人生を味わえる。部屋子の喜久雄、世襲の俊介。人生のすべてを芸の肥やしにしてしまうことの苦労と切なさがつきまとい、歌舞伎をひたむきに追いつづける二人の姿に心打たれました。万人には、そういう生き方はできないだろうし、**そこまでして**

極めるのが芸の道なのかと圧倒された。」

丸善丸の内本店 高頭佐和子さん

感想「『国宝』素晴らしかったです。興奮で脳内の血管が切れるかと思いました。高度成長期から現代まで、一人の男が頂点を極めて行く様を見事に描き切っていて、私の想像の範囲を軽く超えているというか、主人公をはじめとする登場人物たちの熱、作家の熱、時代の熱、そして読者である私の熱が影響しあ

って、**とてつもないエネルギー**を小説が放っているという感じがいたします。」

八重洲ブックセンター本店 内田俊明さん

「誰もが前進を躊躇してきた、文学表現という戦地の最前線から、吉田修一が大いなる戦果をあげて凱旋してきた。この猥雑ながら格調高い、**高貴なる**

異形の物語を、いますぐ体感すべし。」

喜久屋書店小樽店 渡邊裕子さん

最も胸を打たれたシーン

下巻 256 ページ。「その車、運転してたん俺や」野田のそんな声が落ちてきたのはそのときでございました。

感想「夢の途中で病にたおれ、終わりを強いられた男の苦しみと、ひとり残され、ただ夢を追いつづけなければならず自らを終わりにした男の苦しみと、どちらが苦しいのかと思ひめぐらせた。表舞台に立つ男と裏側から支える男と脇にいる男と、作品に登場する男たちは、**もうすべてがかっこい**

い！ そして吉田修一作品のラストは、いつも切ない。」

七五書店 森晴子さん

最も胸を打たれたシーン

ラスト間際。楽屋で喜久雄と彰子の一連のくだり。「役者をやめられる役者なんているのかねえ」「さて、行くか」「行ってくるよ」

感想「ただただ圧倒された。アマチュア風情ではございますが、曲がりなりにも芝居に携わり、舞台に幾度か立たせてもらった身としても、あの世界に戻りたいと強く想いが蘇ってくるほど惹きつけられました。役者が生きるのは舞

台なのだと深く心に突き刺さりました。**久しぶりの高揚感**でした。素敵な作品をありがとうございました。」

紀伊國屋書店新宿本店 小出和代さん

感想「**絢爛豪華**な舞台と奈落が、息つく暇なく回る回る！ 巻き込まれるから**覚悟して読んで！**」

紀伊國屋書店西武渋谷店 竹田勇生さん

感想「彼らが舞台へ上がり舞う姿は真実、魅力的なのであろう。ただ地べたを這いずり回るように足掻いている姿にもまた、沸き立つ血を抑えられないのである。栄光も挫折も傍らに置き、一度きりの舞台という刹那を生き直し続け

る彼らに、**いつまでも拍手を送っていたい。**」

紀伊國屋書店梅田本店 小泉真規子さん

感想「**芸に魅入られ、狂わされ、生ききった『国宝』**

の舞台、とくにご覧あれ！」

紀伊國屋書店和書販売促進部 佐貫聡美さん

感想「〈役のためなら、どんな泥水でも飲んだら〉——歌舞伎に魅せられた青年達の友情と確執、美しい舞台の裏で繰り広げられる泥臭いドラマに**一気読み**でした！ 芸の道を極めるほど、周囲を傷つけ孤立を深める喜久雄。トップランナーであり続けるとは、かくも厳しく残酷なことか——。天才・喜久雄の

情熱と気迫に圧倒されました。」

メトロ書店 川崎綾子さん

最も胸を打たれたシーン

上巻の道成寺の舞台のシーン。書き手の語り口がそれこそ舞台を見ているかのようで、ぐいぐい引き込まれました。

感想「二十年前に『最後の息子』でデビューされた頃から、ずっと応援してきました。『悪人』が出たときには、〈これぞ、吉田修一代表作！〉と思いました

が、今回の『国宝』を読んでまごうことなく〈**これが吉田修一の代表作だ！**〉と痛感しました。読み終わってうちひしがれました。」

札幌弘栄堂書店パセオ西店 石川幸さん

感想「松嶋屋ファンとしては、**上方歌舞伎の歴史を見守るような**

気持ちで読んでしまいました。章立てと同様に喜久雄の人生そのものがひとつの舞台であり、だからこそあのラストなのだと。二代目半二郎が曾根崎心中の稽古中に発した言葉が、結果的には喜久雄の生涯につきまとう宿命のように思われ、読後何度も読み返してしまいました。歌舞伎が見たくなる小説です。」

ジュンク堂書店奈良店 渡部大輔さん

感想「順風満帆とは言えないけれど、役者の道を突き詰めてきた**三代目花**

井半二郎の迫力に圧倒された最後の場面でした。それと同時に三代目花井半二郎こと立花喜久雄に起こったそれまでの出来事を次々と思ひ出し、幸せそうな顔で劇場から出て行く姿になぜか安心もできたのでした。」